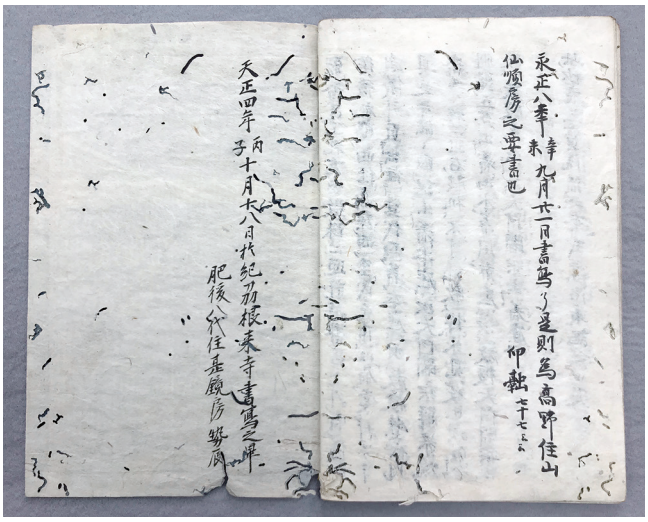
2019 | Autumn | 通巻4号

和歌山大学
紀州研 News Letter

文化庁
平成31年度地域と共働した
博物館創造活動支援事業

きのみなと

紀之水門



資料紹介　灌頂雜集　存二巻二帖　紀州経済史文化史研究所管理 一ノ橋文庫蔵

天正四年[1576]肥後願成寺十三世 釈勢辰写、綴葉装。上冊25.2×15.7 糎、下冊25.0×15.8 糎。上冊の末尾には、永正八年[1511]に、高野山無量光院の学匠であった印融[1435-1519]が高野山仙順房所蔵本に拠って書写した旨を示す本奥書が見える。元来の『灌頂雜集』六巻は、高野山西院智明院澄円が正応五年[1292]に著した三宝院流伝法灌頂の本式および治承記の口決で、灌頂の諸事について秘儀を説いたものである。高野山金剛三昧院・高野山龍光院に室町中期頃の写本が伝来する他、善通寺に享保十四年[1729]の写本が伝わる（日本古典籍総合目録データベースに画像有）。

本書は、同書全六巻のうち巻一および巻二を書写したもの。勢辰が六巻全てを書写したのかどうかは不明だが、現存本の外題（原装表紙の原貼題簽）および内題に見える「第一」「第二」に「第上」「下」となるよう重書訂正が施される。現在、願成寺に伝来する、本書をもとに猷禅が宝暦八年[1758]に書写した本では、外題を「第一上」「第二下」としていることから、江戸中期以前の段階で既に現在の重書訂正が行なわれていたらしい。

本書にとって最も重要なことは、天正十三年[1585]に羽柴秀吉の兵火によって根来寺が大きな被害を受ける直前、中世末期の根来寺に修学した勢辰によって書写された一本であるという点である。天正二年に初めて根来寺を訪れて以後の勢辰の動向については、中川委紀子「願成寺勢辰にみる中世末期根来寺教学の一断面」（『根来寺史』史料編一、1987）に詳しいが、本書の存在によって、勢辰書写聖教の全容解明にまた一歩近づくことができるだろう。

（大橋直義／中世日本文学・文献学）

紀州研
WAKAYAMA UNIVERSITY

研究エッセイ

紀州藩「徳川頼宣」の名前について

瀧野邦雄／中国哲学史（和歌山大学 経済学部）

新しい元号が発表され、その出典が『万葉集』であったとしてかなり話題になりました。そこで徳川紀州家の藩祖の名前の「頼宣」の出典に少しこだわってみたいと思います。「頼宣」は、もともとは「頼將（よりのぶ）」と名乗り、元和年間（1615年～1624年）に「頼信（よりのぶ）」と、さらに「頼宣（よりのぶ）」と改名した、と『南紀徳川史』に記されています。

そもそも、最初の「頼將」という言葉は、『史記』孝文本紀に、

> 下詔書曰、…頼將・相・列侯・宗室・大臣誅之、皆伏其辜…。
>
> （[文帝は] 詔を下して言った、「軍の長である将軍や宰相・諸侯・宗室・大臣に頼って呂氏を誅したおかげで、すべてその罪に服した……」と）。

とあるのによったといえなくもありません。これは、漢高祖劉邦の没後、高祖劉邦の呂皇后を頂点として、前漢帝国を動かした呂氏一族が滅ぼされて、文帝が即位した時の詔に出てくる言葉です。日本史についてはまったく詳しくないのですが、最初の「頼將」の名前をもらった慶長11年（1606年）の段階では、まだ豊臣家が健在でした。秀頼の生母の淀殿もいます。

ここからはまったくのこじつけになります。呂氏一族の頂点の呂太后は、高祖劉邦の皇后でしたし、淀殿は豊臣秀吉の側室であり、立場は似ています。すると、後の「頼將」を「将」として、この一族を滅ぼしたいという意味が、「頼將（將に頼（たよ）りて）」という名前にこめられていたのでは、と考えてしまいます。たしかに、徳川家と豊臣家との間で起こった、大阪の陣では、徳川頼將は十四歳で大阪冬の陣に加わっています。

元和年間（1615年～1624年）に「頼信」と名前を改めたのは、元和元年（1615年）に豊臣氏が滅び、「頼將（將に頼（たよ）りて）」の意味が無くなったための改名かもしれません。ただ改名に当たっては、「頼」字は、徳川家の遠祖とされる清和源氏の通字の一つである「頼」字を用いているようなので、取り替えられません。そこで、下の「將」字のみの変更となったのでしょうか。この「將」と「信」とがかかわる用例として儒教の経典のひとつ『春秋左氏伝』に、

> 趙文子（趙武）曰、…武將信以爲本。循而行之（『春秋左氏伝』昭公元年傳）。
>
> （趙文子（趙武）がいうには、…私（趙武）は信（信義）を本と考え、信義を遵守するつもりです…）

徳川頼宣像（和歌山県立博物館蔵）

というのがあります。この箇所の「將」は再読文字で「將（まさ）に～せんとす」と読むべきだと思いますが、字面だけをこじつけて読むと、「武將（ぶしょう）信以て本と爲す」となります。すると、「武將」は「信」を根本とし、それに従うというような意味を示しているということもできるのではと思ったりします。

その後、さらに「宣」と変更になったのは、やはり『春秋左氏伝』に、

> 狐偃言於晉侯曰。求諸侯莫如勤王。諸侯信之。且大義也。繼文之業。而信宣於諸侯。今爲可矣『（春秋左氏伝』僖公二十五年傳）。
>
> （狐偃言が晉侯に言う、「諸侯のトップとなるのには、王によく勤めるのにこしたことはありません。そうすれば、諸侯はそれを「信」じます。その上、大義があって、父祖文侯の偉業を受け継いで、「信」を諸侯に「宣（宣言）」するのは、いますべきです」と）

にもとづいたのかもしれません。そうであるならば、これまで「信（信義）」にもとづき、それに従って王（徳川宗家）に仕えてきたので、そのことをいま諸侯に「宣（宣言）」するという意味が込められていたと考えられます。

すると、豊臣家を滅ぼす「將」としての任務を期待された「頼將」から、「武將」として「信（信義）」を尽くす立場になり、さらに自分が徳川宗家から「頼（たよ）られている」ことを諸侯に今まさに「宣（宣言）」するとな

ったのではと勝手な推理をしてしまいます。

ただし、これはすべて、名前の由来が中国の古典に基づいているという前提での勝手なこじつけにすぎません。日本の古典に基づいている可能性も大いにあります。また、単純に「將」も「信」も「宣」もすべて「のぶ」という読むことから選ばれただけであるかもしれません。

炭鉱の歴史を考える

長廣利崇／日本経済史（和歌山大学 経済学部）

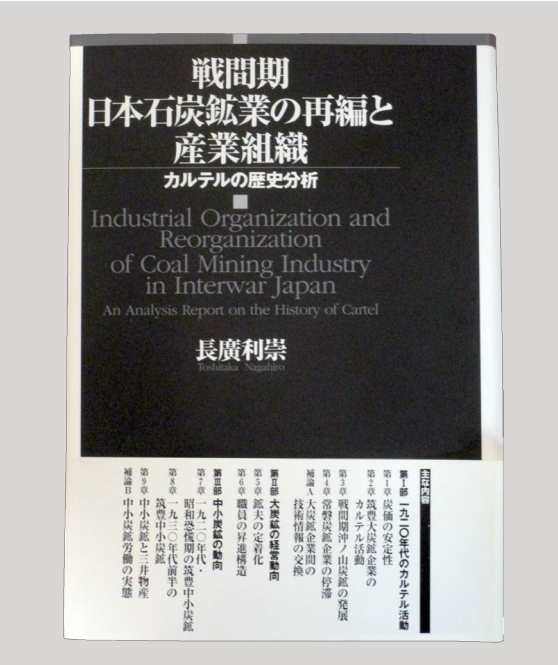
夏目漱石の『坑夫』では、「世の中に労働者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもっとも苦しくって、もっとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた」と鉱山労働者が描写されている。ユネスコの世界記憶遺産に登録された山本作兵衛の絵画には、産炭地筑豊における炭鉱労働や風俗のみならず、炭鉱事故や暴力についても記録されている。炭鉱は社会を映し出す鏡として、戦前期日本の労働者の低い生活水準や劣悪な労働環境のみに言及されていた。しかし、1980年代後半には第一次史料の使用によって実証性が高まり、日本の「恥部」としての炭鉱イメージは幾分解消されていった。

こうした修正史観は1990年代に加速した。従来、未発展といわれてきた戦前期の日本の産業や制度を捉えなおす動きが進んだ。私の炭鉱史の研究もこの流れを大きく受けて始まった。修正史観にありがちな失敗は、非成長などのマイナスイメージを成長などのプラスイメージに置き換えただけのものである。こうした誤りをしないため、成長／非成長の根拠となる経済理論と実証性を高めるための第一次史料の使用が必要となる。

そもそも炭鉱のマイナスのイメージとは何か。炭鉱には坑内労働と坑外労働がある。このうち負のイメージをもたらしているのは坑内労働である。暑い坑内で岩盤崩落などの危険にさらされながら、体力を必要とする労働をする。明治初期には囚人労働が用いられたように、過酷な労働である。こうしたことから炭鉱は人々の就業選択に最優先されるものではなかった。とりわけ、他地域から産炭地で働く者のなかには、事業に失敗した者が含まれていた。労働の過酷さは出勤率を低下させた。幾分かの前金を渡されて入職したものの、労働に耐えきれず、逃げ出す者もいた。逃げ出すことは「ケツワリ」と呼ばれ、鉱夫監督方から追われて暴力を受けた。さらには、炭鉱爆発や地盤崩落などの恐怖に労働者は常に脅かされていた。

過酷・恐怖・暴力という負の価値が石炭産業を支配してきた。さらに、これらを是正できなかった政府と企業が批判されてきた。しかし、私が明らかにしたことは、こうした事実は明らかに存在するものの、1920年代になると財閥系炭鉱は労働環境の改善に取り組みはじめたことである。これは、1920年代の不況に際して、生産性を上げる一連の取り組みのひとつであった。この企業の経営方針によって解雇された労働者もいたが、生産性の上昇に伴い労働者の賃金が上がった。具体的な内容は公刊した著書にゆずりたい。

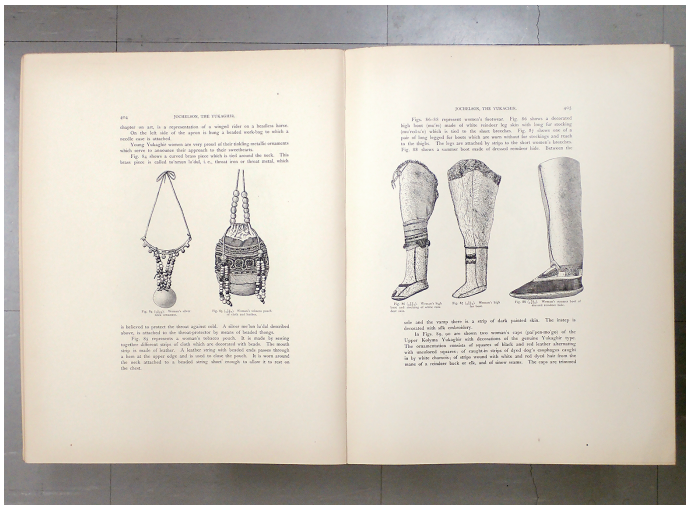
炭鉱の歴史は社会を映し出す鏡である。政府の政策、企業の戦略などがここには凝縮されている。今後も石炭産業を通して歴史を学びたい。



TwitterやFacebookの
動画もCheck It Out !!

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος —
紀州研に所属する研究者（ロギオス λόγιος ）たちの研究を紹介します

私の専門は言語学で、特に東シベリアの少数民族ユカギール人の話す言語の一つ、コリマ・ユカギール語の研究が中心です。現地（日本のほぼ真北、北緯64度付近）で1995年度以降、数回のフィールドワークを重ねました。そのデータをもとに小文法や語彙集などをまとめてきましたが、最近興味を持っているのが民話です。



民族学者ヨヘリソンの仕事

ごく最近まで文字を持たなかったユカギール人たちは、他のシベリアの諸民族と同様、口承伝承で多くの民話を伝えてきました。今でもおじいさん・おばあさんたちが、興が乗れば語ってくれますが、当然ながら全部コリマ・ユカギール語。最初は全く歯が立ちませんでした。それでもだんだんと慣れてくると、語り口や「持ちネタ」などが一人一人違っているのがわかり、その話術にメモを取るのも忘れて聞きほれてしまいます。

コリマ・ユカギール人は17 世紀半ばからロシア人と接触がありました。中でも特筆すべきは、ロシア革命直前の19 世紀末、この地域で長期間のフィールドワークを行った民族学者ヨヘリソンです。ヨヘリソンの残した記録は膨大で、多数の民話のテキストも含まれています。

最初は統語論の研究資料としてアプローチした民話ですが、現在では語りそのものにも親しみを感じるようになりました。紀伊半島にも民話は多数伝えられていることでしょう。内容とともに、地域のことばで語られる、その語りそのものも、後世に伝えるべき貴重な文化遺産として記録に残す価値があると考えます。　（遠藤史／言語学）

私が取り組んでいる研究テーマのひとつに、障害のある人への「合理的配慮」に関する理論研究があります。合理的配慮とは、障害者が生活するうえで支障となる社会的障壁（バリア）を除去する措置であり、2016年に日本の法体系に初めて導入された新しい概念です。スロープを渡すなどの「物理的環境への配慮」や、筆談するなどの「意思疎通の配慮」がイメージされやすいですが、障害の特性に応じた休憩時間の調整などの「ルール・慣行の柔軟な変更」も含まれます。ルールや慣行は、多数派のニーズを前提に形成されており、障害のある人にとっては社会的障壁になりえるためです。これまで自明視されてきたルールや慣行の見直しを迫るという意味で、合理的配慮は、この社会に生きる人すべてを障害問題の当事者の位置に置きます。

共同研究の成果をまとめた著書

障害者への合理的配慮を求める法律の施行に伴い、この考え方に対する様々な誤解を解きほぐすことを目的に、研究仲間たちと『合理的配慮——対話を開く、対話が拓く』（有斐閣、2016年）を出版しました。副題には、合理的配慮の実現には障害のある人と相手方とが互いの事情を考慮して応答し合う「対話」が必要であり、そうした「対話」が障害以外の領域での社会問題の解決にとっても有効なのではないか、というメッセージを込めました。

合理的配慮は社会福祉学の研究テーマと考えられがちですが、差異をもつ者同士の「共生の技法」になりうるという意味で、すぐれて社会学的な主題です。共同研究の成果をまとめた2冊目の著書が今年度中に出版される予定です。

（西倉実季／社会学）

私は、植物体中の物質輸送の分子メカニズムに焦点を当てた研究を行なっています。植物の成長に必要不可欠な肥料成分の輸送効率を高めることができれば、畑に撒く肥料を従来よりも少なくすることが可能となり、環境負荷が低い農業の実現に一歩近づくと考えているからです。さらに、植物の物質輸送の改良は土壌から吸収されるミネラル（鉄分等）の可食部への輸送を促進し、栄養価の高い作物の作出（育種）に繋がります。

栄養欠乏によって葉脈の間の色が薄くなったダイズの葉

物質輸送には細胞が大きく関わっています。植物の根に焦点を当てると、水や栄養分さらに細菌等が自由に行き来することができる細胞間隙があります。一方、植物の根から体内に入り込むためには細胞膜上にある“トンネル”を通過する必要があります。そのトンネルはタンパク質で構成されており、通過する物質を選別していることが知られています。タンパク質は暗号化された遺伝子の情報を元に組み立てられています。したがって、目的の遺伝子が明らかになれば、その情報を改変することで“トンネル”の改良が行えます。

遺伝子の情報は長い時間をかけて紡がれてきた生命の歴史とも言えます。私は遺伝学や分子生物学の手法を用いて、これまでにいくつかの硝酸や鉄の“トンネル”の遺伝子を明らかにしてきました。現在はイネの遺伝子に人為的に傷をつけた突然変異系統を栽培しながら、ソルガムやダイズ等の作物のミネラルの輸送や蓄積メカニズムの解明に取り組んでいます。

（荒木良一／育種学・植物栄養土壌学）

イベント報告

2019年 オープンキャンパス 百人一首かるた大会

7月14日(日)のオープンキャンパスで、かるた大会を開催しました。今年は雨天により足元が悪いにも関わらず、例年通り多くの中学生・高校生が来てくれました。

大会の内容としては前回までと同様に、菊川先生の作成した「セレクト20」(百人一首を20首に選出した手作りかるた)を用いて、中高生たちに対局してもらい、原則的に同じ勝敗数になっている子同士を対局させていくというものです。

また、今回は競技かるたサークルの方々にご協力いただき、実際の競技かるたの実演を披露しました。

毎年12月に行われている「学長杯かるた大会」では、すでに百人一首に慣れ親しんだ子どもたちが多いのですが、今回のかるた大会に来場してくれる中高生たちはそうではありません。かるたを部活でやっているという生徒から、百人一首に触れたことがない生徒まで、様々です。だからこそ、対局の合間に「作戦タイム」を設けて和歌を覚えてもらうようにしたり、和歌の内容紹介をしたりと、百人一首の魅力や古典の世界に関心を持ってもらうという工夫を盛りこんでいます。

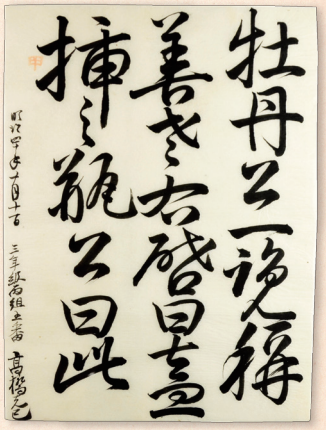
古典に苦手意識を持つ中高生が少なくない中、かるた大会は、そういった中高生でも楽しみながら古典を楽しむことのできる催しであり、オープンキャンパスにおいてかるた大会を開催する大きな意義になっているといえるでしょう。

（大成一維／教育学部 三回生・紀州研ボランティアメンバー）

資料紹介

新収

「髙橋家資料（文書・記録・記念物・書籍）」の概要と史料的価値



髙橋家は和歌山市木ノ本の旧家である。筆者は2002年秋より調査に取り掛かり、本年5月に漸く目録を完成させ、所蔵者髙橋浩爾氏に提示することができた。目録化した資料群はA 髙橋家記録・記念物、B 日記、C 古文書類、F 和綴本、I 写真、K 髙橋克己関係、L 同顕彰関係、ほか祖父助一郎・父二郎・弟潤二郎・弟進等関係の資料、有吉家関係、木ノ本村（近代文書）関係、合計2643点である。その中に郷土誌・日本史関係、科学関係、文学関係等の書籍（洋本）886点（890冊）が含まれている。なお、同家所蔵の木ノ本村古文書の多くは和歌山県立文書館に寄託されている（『海士郡木本村　髙橋家文書目録』）。

本資料群から、まず和歌山市出身の科学者髙橋克己の生い立ちや家族関係が判明し、祖父助一郎・父二郎は、明治初期～昭和戦前期の地方名望家・起業家であり、当該地域の近代化、産業革命期の様相がわかる。理系の教養文化人潤二郎は美学・芸術、宗教哲学等の幅広い蔵書を有し、郷土史家の末弟進は郷土史関係資料・書籍（今日では入手できないものも多い）を有した。同氏から親戚有吉佐和子に小説ネタを提供したこともわかる。

2019/08/17（藤本清二郎／日本近世史　和歌山大学名誉教授・教育研究アドバイザー）

岡の里古墳出土の須恵器

紀州研所蔵の考古資料は、戦前の師範学校時代の郷土室（『本校郷土室目録』『郷土研究資料目録』1934年）等に所蔵されていたもの、戦後学芸学部歴史学教室等に寄贈されたもの、1950年代後半に考古学研究会の学生による発掘調査（寺山古墳群や高尾山古墳）で出土したもの、1967年に再建された考古学研究会の踏査などで収集したものがあり、これらの資料は旧真砂キャンパスの歴史学教官室等に置かれていた。その後、栄谷キャンパス教育学部棟を経て1999年に紀州研が図書館棟へ移転後、教育学部歴史学教室で保管していた上記の考古資料が一括して紀州研に移され、県教育委員会から譲渡された栄谷キャンパス敷地内の高芝古墳出土遺物とともに紀州研で所蔵している。

岡の里古墳は、刺田比古神社岡の宮の境内にある。『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11輯（1932年）によれば、1932年1月に発掘され、石室のほか人骨の一部や土器が出土したようであり、6点の須恵器（脚付長頸瓶4、無蓋高杯2）・2点の土師器（小型壺1、盤1）の写真が不鮮明であるが同書に掲載されている。

刺田比古神社にはそのうち1点の破損須恵器が保管されているようで、2点の須恵器が紀州研に所蔵されている。1974年頃に考古学研究会が作成した遺物台帳にこの2点の記載があり、2点とも脚付長頸瓶である。1点は現高18.6cmで、頸部の先端が少しと脚部がほぼ欠損しており、脚部付近には4か所の透かし切り込みの痕跡がある。もう1点は現高11.7cmで、頸部は完全に欠損している。2点とも、土器に墨書で「岡の里古墳出土品、岡ノ宮神社寄贈、昭和三十年一月二十七日」とあり、旧考古学研究会が寄贈を受けたものと思われる。

（上村雅洋／経営史　和歌山大学名誉教授・教育研究アドバイザー）

2019年

わかやま文化財の「匠」講座
「粉河祭のウラのウラ」参加記

初等中等教育には、文部科学省が告示する教育課程の基準である学習指導要領がある。2017年7月（高等学校は2018年7月）に公表された小・中学校の新学習指導要領解説（社会編）では、「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられた。

一方で、社会科の教育内容としての「観光」にも注目が集まりつつある。例えばシンガポールでは、2017年に発表された後期中等教育の地理シラバスで、ツーリズムが取り上げられ、持続可能な観光旅行の推進と地域住民によるサポートについても学ぶことになった。しかし、私はといえば、そもそも文化財や観光って何だろう？というところからわからない。本講座には、そのような「基本のキ」を学びに参加した。当日は、吉村旭輝先生が粉河祭について、大橋直義先生が粉河寺・粉河産土神社についての解説をしてくださった。

文化財保護法では、「民俗文化財」は「我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」（第二条）とされている。また、小学校学習指導要領では、文化財や年中行事に関して、その継承やそこに込められた願いを理解することが求められている。「生活の推移を理解」するのは、（多分）おまつりの外にいる人だろう。存続・継承に関しては、企業などからの支援なしは成り立たないという話もあった。この企業も、おまつりの内だけではないようだ。一方、伝統的なまつりであっても、装束やかけ声、だんじりの機構等々、変化している部分があり、これは、

まつりを取り巻く環境の変化のみならず、参加する人たちの「かっこよさ」の追求によって生じるもののように感じた。観光に関しては、大祭礼に関しては有効だが、少子高齢化や生業の変化のなかで、まつりに新たな意味を見いだしていくことが求められているという話もあった。本講座に参加して、おまつりをめぐる今日的な環境に触れることができた。

（岩野清美／教育学部　社会科教育）

ようこそ！紀州研ボランティア活動へ！

紀州経済史文化史研究所の学生ボランティアでは、様々な活動を行っています。その中で今回紹介するのは、紀州研の展示作業の補助とSNSでの宣伝活動です。

ひとつめの活動の具体的な内容は、展示品の配置や展示品の説明が書かれたパネルの作成などです。この活動の最大の魅力は、実際に古文書などの文化財を直接扱えることです。取り扱いに細心の注意を払うことはもちろんですが、何百年の昔に書かれた文字やその紙などに触れることは、普段では経験できない貴重なものです。

ふたつめの活動は、紀州経済史文化史研究所の活動をSNSで発信していくというものです。紀州研ではその活動内容を多くの方々に知っていただくために、紀州研ボランティアに所属する学生が主体となって、SNSを活用しています。告知の方法なども全て学生が考えながら、運営しています。大学の研究機関のSNSということもふまえながら、幅広い年齢層の方々に紀州研の活動を認知してもらうことを目指して試行錯誤しています。

紀州研の学生ボランティアではこのような幅広い活動を、様々な機会を通して行っており、普段の大学生活では得ることのできない貴重な体験ができる場となっています。SNSアカウントは下記の通りです。興味のある方はぜひアクセスしてみてください。

■Instagramアカウント　Kishuken_wakayama　■Twitterアカウント　@kishuken_notice

（阿山健人／教育学部四回生　紀州研ボランティアメンバー）

information

2019年度 企画展 ぶらくりのこれまで・今・これから —紀州のまち探訪—

会　　期／2019年8月29日[木]～10月18日[金]
会　　場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所
　　展示室(西5号館[図書館棟]3階)
入　　場／無料
開館時間／10:30～16:00
休 館 日／土・日・祝日・図書館休館日

和歌山市最大の繁華街であるぶらくり丁は、1601年(慶長6)の浅野幸長の和歌山城入城による鷺森別院門前の参詣道の拡充、また1621年(元和7)の徳川頼宣による城下町整備により、町割りが形成されていきました。この場所に紀州徳川家の御用商人であった茶屋小四郎(茶屋四郎次郎の四男)、駿河から頼宣に同行してきた岡本善右衛門(現駿河屋)らを住まわせたことなどから、本町を中心に現在のぶらくり丁の基礎が形成されていきました。江戸時代には和歌祭にさまざまな芸能を出すなど、当時繁栄していたことが考えられます。

明治以降も市電の開通などをきっかけに、ぶらくり丁は和歌山一の繁華街として発展していきました。昭和の後半には正面を向いてすれ違うことが難しいほど、和歌山市内や近隣の市町村から買い物客が押し寄せました。しかし、平成の30年間は、丸正百貨店をはじめとする核店舗の撤退、回遊客の減少など、ぶらくり丁にとって大きな試練の時代となりました。現在、本町・ぶらくり丁地区の各商店街を中心に中心市街地の振興がはかられています。それとともに、市堀川などを活用した新たなまちづくりも進められています。

本展は「ぶらくりのこれまで・今・これから」と題して、ぶらくり丁が歩んだ歴史を振り返り、現在、そして未来へとつづく商店街の今後を考えてみたいと思います。

(藤田和史／地理学)

曝書　紀州研所蔵品　虫干し見学会

日　　程／2019年10月18日[金]・19日[土]
会　　場／和歌山大学 紀州経済史文化史研究所
　　展示室(西5号館[図書館棟]3階)
入　　場／無料
開館時間／13:00～16:00

古来より、日本には、年に一度、所蔵する書物を始めとした文化財に風をとおして虫干しを行ない、あわせて収蔵品台帳と照合する曝書(曝涼)と呼ばれる習慣があります。

今秋、2日間にわたって行なう曝書では、「虫干し見学会」として、広く地域の方々にもご見学いただくことといたしました。詳細は、HPおよび弊所公式SNSにおいて、告知をいたします。地域の文化財を実際に目の当たりにできる機会でもあります。ぜひお越しください。

(吉村旭輝／芸能史学・博物館学)

石橋生菴「家乗」(紀州藩家老三浦家文書)

編集／発行　和歌山大学地域活性化総合センター 紀州経済史文化史研究所
〒640-8510 和歌山市栄谷930 [e-mail] kisyuken@ml.wakayama-u.ac.jp